

南方（仏印）

仏領インドシナ

駐屯軍司令部勤務の

衛生兵の手記

福井県 松塚 喜代隆

私は昭和十六（一九四一）年徴集の陸軍現役兵である。昭和十六年十二月十日ころになると、現役兵は一月十日、二月十日、三月十日、四月十日と順次部落の役場の兵事係より「○月○日午前十時に○○部隊へ入隊せよ」と指令が届く。既に十一月二十日には同級生が「俺は十二月十日に東京の近衛騎兵隊に入隊する。一足先に行くが元気だな」と別れの挨拶をして帰って

行った。

ここで思いもよらぬ大事件が勃発した。大本営は「十二月八日今未明、日本陸海軍部隊はアメリカハワイ真珠湾に停泊中の戦艦、巡洋艦、駆逐艦、航空母艦を爆破、轟沈、炎焼大破し、また陸上に待機中の飛行機○○機を大破炎焼し、米英国に対し宣戦を布告し戦闘状態に入った」と発表された。それに呼応されたのが国民は大歓声と興奮と戦果に「万歳！ 万歳！」と酔いしれた。

既に二、三カ月後には入隊する事が決まっている私達は、一体どこへ入隊するのか全く定まっていなかった。役場から入隊せよとの通知が届いたが、それには「昭和十七年四月十日午前十時、福井県鯖江歩兵第三百三十六連隊連隊砲中隊」と記してあった。四月九日

は、両親兄弟七人及び従兄弟をはじめ大勢の親類の方を交えて最後の送別会を催してくれた。翌日は、いまだ夜が明けない中から母や妹達が起きて朝食の準備に余念が無い。そして予定した通り兄が付き添いで、日用品や洗面具等必要品を持ち玄関に立つと、既に家の回りや前の広場はたくさん見送り人で湧いている。出発と同時に簡単な挨拶を行い、幟を先頭に駅に向かって歩く。両側は押すな押すなの大勢の村人であった。

電車には下りの方から入隊兵や見送り人が乗った。万歳の声は一段と大きくただ感無量の言葉通りであった。

「両親よ兄弟よさようなら」と思った瞬間ドーンと涙が流れてきました。どこの駅でもただ「万歳！万歳！」の声しか聞こえない。

そのうち連隊の在る停車駅に到着した。もう連隊は六百メートル位先で、連隊に通ずる道路には旅館、民宿、食堂、土産物屋などが軒を連ねているが、その店先や道路では両親が涙を流し、若夫婦同士が抱き合い

ながら別れを惜しんでいる姿ばかりか、両親の傍らでは何にも知らない幼児たちが無邪気に遊んでいる姿が眺められる。また入隊する息子が、もう少しと別れを惜しむ姿は入隊しても眼から消えなかった。

兄に「どうせ入隊するのだから早く入って、少しでも慣れた方が良いから」と話し、衛兵の方に「連隊砲中隊はどこですか」と尋ねると親切丁寧に案内してくれた。階段を上がって行くと初年兵が四、五人軍服に着替えをしていた。「松塚ですが、場所はどこでしょうか」「廊下側で二番目だ、手箱に名前が貼ってある、日用洗面器はその手箱に入れ、襦袢、袴下等も着替え軍服を着て、私物はすべて付き添いに持って帰ってもらえ」と。兄は近くで心配そうに見詰めていたが、私の動作の早いのに安心してらしく私物を風呂敷に包み「じゃー元気でな」と一言いって帰って行ったが、その兄は昭和十九年召集され、シベリアに抑留され、二十七歳の若さで戦死したことを復員して知った。いよいよ軍隊生活が始まった。夕食は珍しく赤飯が

配られた。古兵、二年兵、新兵全員が揃ってのご馳走だった。一夜明け起床ラッパの音で営庭に駆け足、点呼だ。遅い者、釦の外れている者、中には下駄箱が分からないのか素足で並ぶ者等いろいろだ。私は学校を卒業と同時に商人になりたくて七年間丁稚奉公で修業したため、掃除、洗濯やソロバンは得意で絶対自信があった。日が経つにつれて古兵連の一品検査と、それに伴う私的制裁が度を増して来た。入隊前より先輩から聞いていた勇猛果敢な第三百三十六連隊の内務班の教育は、毎日私物検査、整理整頓で、班員の一人の不始末による全員整列ビンタと相手同士の叩き合いと聞いていた。

毎日演習と訓練もどうやら六カ月の教育を終える。連隊長及び参謀本部将校、各中隊長の第一期の検閲を受けた。その後は営内で一般の仕事に従事する。職業は蹄鉄、鞍工、炊事、喇叭、衛生その他である。衛生を希望し中隊の人事係准尉に申し出た。各中隊から一人採用のところ三十数人となり試験となった。私は十八点のトップ合格をした。これから六カ月間厳しい

衛生救急法の教育が隣の陸軍病院で実施される。

連隊からは各中隊より一人で十五人が朝八時に医務室に集合し陸軍病院へ通学、連隊と病院合わせて三十五人の教育が始まった。初めは簡単な勉強だと考えていたが、日を追うごとに難しくなり、時には人体解剖やウサギや犬を麻酔で眠らせ、内臓の位置やその機能の働きを綿密に勉強し、また時には化膿した外傷患者の治療や膿の出し方ガーゼの挿入方法、担架で後方に搬送する骨折患者の副木装着法等覚えることは山ほどあった。

私は夜の点呼が終わると薄暗い厠に入り、股木の所に新聞紙を敷き、暗い電灯の下で毎夜十一時過ぎまで予習や復習をした。病院は看護婦が共に勤務しているため、女性嚴禁の病院では協見をしたと因縁を付けられ、連隊の者はどれだけ叩かれたか分かりませんが、頑張った甲斐あって卒業は三番で、連隊の医務室では事務室勤務となった。

毎日八時に中隊の患者を整理させ医務室へゆく。まず内科患者に軍医の診察を受けさせ私はその助手を勤

め、我が患者が終わると今度は外科患者の治療に励む。皮膚病や潰瘍患者は悪臭が鼻を突くが、これが日常の任務であると同時に、治療で治って来るのが大好きだった。

また特に熱中したのは連隊全員の予防接種だ。私は特に早かった。ある夕方同年兵が私を探していた「松塚衛生兵、実は廊下の片隅で一人が頭から血を流し顔面を両手で覆いながらしゃがんでいるから見てくれ」とのこと。早速跳んで行くと、両手を真っ赤に血で染めていた。静かに医務室に連れて行き、日直上等兵に実情を話して縫合の針及び糸にベアン鉗子二個を借り治療室に入った。まず傷口を見て入念に前頭部の傷口を消毒し、異物が無いかを確かめ、ベアン鉗子に針を挟み糸を通して釣針のような針で一方の皮膚片から一針ずつ五針を縫い、傷口が平面になるように押さえて簡単に絆創膏を貼って五日後の抜糸を伝えて終わった。

私はこれが初体験であり手の感触も伝わって大いに自信が付いた。原因は夕食後お風呂から帰り道、古兵

から「貴様は態度が悪い」と言われ、突然木銃で前頭部を叩かれ五センチ近く割れたとのこと。その日は患者の事が頭に浮かんでなかなか眠れなかった。

五月のある日高級軍医が私の机の前に来られて「松塚この書類に目を通して置け、返答は急がなくても良いから」とバインダーに一枚の印刷物が挟んであった。早速拝見すると豊橋中部軍司令部発の命令書で、「仏領印度支那駐屯軍司令部軍医部へ衛生兵一人派遣せよ」とのことだ。私はこのチャンスを利用しては絶対駄目だと思い、早速高級軍医の元へ「軍医殿私を是非ここへ行かせて下さい」と懇願したら承知してもらえた。

四日後の夜の点呼後、班長より「この班の松塚衛生兵は本日付命令により仏領インドシナ軍司令部に転属した」事を読みあげると班内一同には驚きの声が上がった。人事係准尉の計いで「君は南方へ行く事が決まったので三泊やるから、実家に帰り両親や兄弟と良く話し合っ来て来い」とのことです。実家に帰り、南方へ行く

く心構えを話し皆に安心させました。

五月二十八日、衛生上等兵に進級して豊橋中部軍司令部に出頭すると、各部隊から選抜された下士官四人、兵二十五人、衛生兵一人計三十人の一団で編成され、六月二十五日急遽宇品港で待つ輸送船「三池丸」に乗船した。近くに待機していた僚船「安芸丸」が既に出発準備を終えており、日没時を見計らって二隻で一路台湾へ向かい、高雄港に入港した。港では現地人がバナナを積んで船に近寄り、長い竹竿の先の籠にバナナ一房を入れて甲板めがけて差し出し、「タバコ一個交換、ほまれ一個交換」と叫んでいる。誰かがタバコを入れてやると「ありがとう、有難う」と喜んでいった。

夜間航行を続けた船団はマニラ湾に入った。甲板から眺めた港には船首や船尾を上に出している船、横にマストを倒している船、マストだけ出している船等、沈没船が二十数隻があり、船の墓場となっているのに驚いた。また港の埠頭には何千台ものボンコツ乗用車

が見事に整列され、一見ピルのように積み重ねられていた。我ら一行は上陸し、兵站宿舎で暫く世話になることになった。行進途中、街路樹の美しさや舗装された幅百メートルの幹線道路が直線に東西に続き、見渡す限りの大平原には驚いた。

一方、右側の高台に三階建ての建物があり、学校かと思つて眺めていると要塞として築かれたものという。半分以上が爆撃で破壊され、その物凄さを伝えていた。何でも一階からエレベーターで大砲が上がり、砲筒で攻撃して、用済みとなれば地下に降りるといふものでした。

上陸して二晩目の夜半突然、バンバンと銃声が響いた。非常呼集がかかったが、遅い者四人は私達が整列してもまだ慣れない蚊帳の中でウロウロしていた。ゲリラの襲撃だった。一同は改めて敵地にいる事を痛感した。

午後半日程四、五人組で外出が許されマニラ街を出歩いたが、恐ろしいのが半分で、映画館では『阿片戦争』や『マレーの虎 ハリマ王』が上映されていた。

一週間が過ぎて我々の乗船が入港したことが知らされ、兵站の人と別れを惜しみ乗船した。目的地のサイゴンへ勇躍出発だと喜び勇んで乗船したが、他に乗客はいない。そして案内された部屋はまさか一番下の船倉で畳敷き、それに機関室の隣でエンジンは鳴りっ放しの部屋で一同ガッカリだった。

七月十日頃出港という事で、翌朝四時半頃から船のエンジンが活動を始め、出発だと喜んだが約二時間エンジンがうなっただけで止まってしまふ。二日程、毎朝エンジンは掛かるが船は動く気配は無いので不審に思い、私は船員に尋ねた。エンジンを掛けると敵潜水艦や掃海艇が出没している情報が入ってくるので待機中と、安全第一を願う心は誰でも同じだろう。

また、この船は捕獲船で一万五千トンの大きな客船でダンスホール、映画館、大食堂、ビリヤード等備わった船だが速度が僅かに六ノットと最低で、客も私達三十人だけでさぞ立派な客室に眠れると思っていたのだが一本やられた形だ。

船はそのまま約一週間も費やし、七月十五日によろ

やくマニラを出港した。青黒い海と高波が押し寄せ、船は次第に木の葉のように揺れ始め、仲間には次々と船酔い患者が出始め、私の所へ胸が悪い、気分が悪い、胃が痛いから薬をくれと言って来る。軍医がいないので全部私が処置をしなければならぬ。船員に「ここを通過するには何日位要するのか」と尋ねると、「約一週間程度だがここは魔の南シナ海で男は度胸で漁をしているんだ」と答えた。船の揺れは一段と激しくなり、船幅七十メートル甲板を船が揺れる度にバケツが音をたてて右舷と左舷の間をコロコロと転がっていた。今日で三日間何も食べない者が七〇パーセントもいて毎日残った食事を船員が全部海へ捨てていた。

出港して六日目、荒れ狂う南シナ海の午後六時半頃の薄暮時、船内のブザーがブザーと非常事態を知らせた。「全員、軍装して甲板に集合」の命令が出た。備え付けの救命胴衣は十八センチの太さで幅四センチの丸太の木のコップ六個つないだ代用品である。船のブザーは相変わらずブザーと鳴っている。そのうち誰かが右舷の遙か二百メートル先を指差しながら

「敵潜水艦だ」と叫んだ。全員がその方向に目を移すと黒い潜水艦が静かに浮上し、ハッチを開けて二人の将校が出て来て双眼鏡で我が船の方を眺めていた。その瞬間ほんの二分位だったろう、潜水艦は静かに徐行して波間に消えて行った。船員になぜ攻撃しなかったか尋ねると、この船には君達三十人の客しかいないのを再確認に来たこと、海南島やサイゴン、九州は潜水艦に囲まれているからと助けを求めたが、全速力で逃げてくれと無線連絡があったことを話した。既に制海権は敵の手の中にあつたかもしれない。

それから後は波も穏やかで、二十五日全員無事サイゴンに上陸した。そこには軍司令部から二台のトラックが迎えに来ていた。まず衛兵隊長片山少尉が「長旅ご苦労であった。軍司令部は将校が多いために服装態度は特に敵格で欠礼のないよう」との訓示があつた。トラックに乗車し、カチナ通りの仏国ドック総督官邸前を通り郊外の軍司令部に到着した。ここで一団は解散となり自分の勤務先へと別れた。

私はまず軍医部長に転属の挨拶をし、事務室で将校下士官計十一人と同年兵二人と事務所の皆さんに申告と挨拶をした。同年兵は司令部での勤務内容及び直屬上司の宿舎、軍医に同行して外部に出る場合の注意等を親切に教えてくれた。夕食時には二人の先輩から内地のことを尋ねられ、また仏印は親目的で治安も意外と良く気候も日本と似ている。住み良いがただ蚊だけは注意が必要で、一年中蚊帳は必要だと。

昭和十八年十一月頃になると敵のP38やグラマンが低空で偵察に飛来する回数が多くなり、夜はB29の来襲があるようになった。ある日、誰もまだ起きない朝四時ころから夜十二時まで、グラマン機延べ二五〇機が港の埠頭倉庫や飛行場を重点的に襲撃し、飛行場の燃料タンクがやられ一晩中燃え続け、またドラム缶の破裂音が夜明けまで鳴り響き凄まじい光景だった。しかし我が友軍機は一機も姿を現わさなかった。夜間B29が飛来すると必ず軍司令部の屋根上で電球を振り回す者がいたが、その者は探したが不明だった。

昭和十九年の春にはインパール作戦が本格化して、日本から妻子もあるだろうと思われる中年の召集兵が続々とサイゴンの兵站宿舎に入ってきた。この人達は五、六日休養した上でブノンベン経由で戦場に行くのだろう。一方、インパールのマングル・イラワジ川地区から腸チフス、赤痢、アメーバ性赤痢とデング熱、マラリアなどの患者の一団が搬送されてきた。伝染病患者は陸軍病院へ直送となり、主に外傷患者を私達の医務室で治療することとなったが、既に医務室は患者が溢れていた。一カ月余りお風呂もシャワーも浴びたことがない上に汗と化膿の臭いなどで医務室全体が魚の腐ったような臭いになった。それもジャングル生活だったと聞けば同情する余地もあった。

取敢えず患者にシャワーを浴びさせた。誰を見ても着のみのままのボロボロの軍服で、靴は底はついていても踵は無く、指が外へ大きく出る位穴の空いた姿は、乞食同然と言っても過言ではないほどだった。私は治療に取り掛かる。まず患者を椅子に座らせ、風呂場の椅子のような台に足先を乗せさせた。なぜこんな

になったのかと原因を尋ねると、風呂にも入れず不潔が重なり、蚊や虫に刺されながらジャングルを移動する際には山ヒルに吸血され、痒いので我慢できず掻いたら化膿したと言う。この種の患者が六、七人いると答えた。皮下蜂巣識炎だと直感し、これなら私で治療できると思った。

足の甲は骨だけが固く、回りは化膿してポトポト、骨の下は膿と汚れた血だと思うが、なにぶん悪臭が鼻を突く。治療を始めると足の甲の消毒を入念にして、メスの先端を皮膚に触れたかと思った瞬間、膿が顔面、メガネ、白衣にバット飛び散ったかと思った時、小さな卵のような膿の固まりが患者の足元に押し出され、その卵の芯にはウジ虫がうようよ動いていた。五〇〇ccの大注射器にリバノール液を入れ、排出した骨の奥の肉を洗うため思い切り注射液を吹きかけると、骨と肉の間から次から次へとウジ虫が流れ出て来る。これを三、四回繰り返し赤チンキを塗布し、リバノールガーゼを傷口に挿入し一応治療は完了した。患者は安心したのと膿が出つくしたため痛みが取れ、笑顔に

なり喜んだ。朝夕ガーゼ交換を一週間位するからと伝えて次の患者に移るが、やっぱり皮下蜂巣膜炎の患者であり、体全体から放つ悪臭は鼻先からなかなか離れなかった。

また右膝の右側をブクブク腫らした患者もいた。これは山ヒルに吸血されて化膿したらしい。約三センチの卵子の黄身の大ききの穴で、皮膚の周りは白色で骨までは僅かで、良く骨膜炎にならなかつたと思った。よく念入りに薬を塗布し、ガーゼの交替は朝夕二回必ずと言ひ聞かせた。そのほか変わった患者もいた。その患者は瘍と言ひ膿点が一つだけ、と言ひのは膿点が二つ以上の病氣を言う。共に首筋や臀部で肉の厚い軟らかい所で化膿する。

両方の病氣共に膿は三センチ位の深い所に根があり、芯と共に全部除去しなければ必ず潜って再発生する。治療にはビツク膏と言ひ出しを使うが簡単に貼るだけでは極めて効果は少ない。これも自分の研究であるが、体は清潔にして衣服は良く洗濯することにほかならない。そして完治した者は原隊へ復帰より近

くの部隊へ転属して行つた。

インパール・イラワジ川作戦より送還された外傷患者もほとんど原隊復帰したが、それも束の間、今度は海難者の一同がたくさん医務室を訪れた。顔面をマスクで覆つた患者が二十人近く、実は船が魚雷で沈没したため四時間余り浮いていたところを救助された者たちであるが、船が沈没して流れ出た重油の火の中に首を出したため、首から上が火傷でやられ、耳が焼かれて無くなつた人や眉や鼻がただれているという人はかりだ。若い男の大切な顔面がこんなになって本当にお氣の毒だと思ひながら、眼、鼻、口の部分を開けた大きなマスクに硼酸軟膏を塗り、顔面に当てて一週間はこのままでと休養室で休ませた。このような患者は毎日来た。

現地人も働いている埠頭の被服庫や兵器廠が、軒並みB29の爆撃にやられた。ちょうど夕方の出来事で、軍医をはじめ医務関係者は全員救護班となって現場に行つた。途中、八メートルから十メートルの爆撃の穴

があり、中には片方の足や肉の塊が散乱している。私
は一番新兵だからどうしても私の仕事となる。持って
来た袋やバケツに足や肉片を拾い集める姿を現地人が
じーっと見詰めていた。どんな気持ちで見ていたのだ
ろうか。

爆撃後の患者收容のため、ガレキの下などを探して
いると、頭を下に突っ込んで両足を砂地の上に出して
いる現地人を発見した。足をパンパン叩くとビリビリ
足に反応が起きた。私が強心剤の注射をすると治まっ
たが、二、三度叩いて注射した時には何の応答も無く
諦めた。また付近では頭が割れて脳みそが吹き出し、
砂やほこりが顔を覆っている様子をこの眼で見たが、
戦争の恐ろしさを改めて知った。

サイゴン勤務は一年余となった。戦況の不利は次第
にハッキリ表れ、各地の司令官の交替や隷下指揮下部
隊の最高幹部が軍司令部に來られるようになった。戦
争は益々激しくなり、突然、軍司令官が全員北部仏印
のハノイへの転出が決まり、先発隊として司令部から

六十人が選抜され、救護班としては軍医大佐一人、衛
生薬剤中佐一人、衛生兵一人は私が同行となり、汽車
で出発した。昼間は敵の偵察機でP38型とグラマン戦
闘機の銃撃で山への避難を繰り返しながら一週間を費
やし、全員が無事にハノイに到着した。

早速宿舎や事務所それに医務室の設定に走り回っ
た。二十日後、後続の第二陣が到着したが私達には思
わぬ誤算があり多忙を極めた。その誤算とはサイゴン
の昼は三六、七度の猛暑なのに、ハノイの夜は二二度
まで下がる。夜はひどく寒いので毛布の二枚は上布団
として必要なことが分かったことである。そのため体
の弱い者は疲労が原因でマラリア・デング熱・風邪な
どの患者が多発し、看護に任せてこ舞いの毎日だっ
た。

サイゴンで勤務中に軍司令より内地直行の飛行便が
一週に何度か飛び立った。私は元気でいる事を伝え、
恩賜煙草二個を送り、中の手紙に眼鏡を送ってくれ
と、眼鏡の度数を知らせて置いた。その眼鏡がサイゴ
ンに着き、サイゴンから人事係が小包を届けてくれた

が、兄は召集され北千島で、弟は舞鶴の海軍で共に元気でいると父からの知らせでした。

昭和二十年の正月には在留邦人の家に軍医と共に招待され、ご馳走を頂き楽しく過ごした。邦人の診療や治療は連絡があれば積極的にやれと直属の軍医から言われていた。三月に入ると各方面から各地の部隊が玉砕したとのうわさが耳に入るようになり、戦況不利となった現地の様子が新聞にも記載されるようになった。親しい原住民からは「兵長さんは軍医だから私の国の軍医になりなさい。土地、家屋さらに娘と、全部もらえて軍隊勤めの生活はとて安心だから良く考えて、日本へ帰っても家は焼け、食べ物は何もないこと知らないの」と再三誘いに來ました。

戦争の悪化は予想外だった。軍隊生活を四年して兵長でも内地からの初年兵は一人も入って来ず、私は毎日初年兵の仕事をやらされていた。四月ともなれば内地の各都市がB29の爆撃で焼け野原になったというニュースも耳にし、私の故郷の福井市も大空襲によ

り全滅したことも聞いた。今度は日本に帰るべきかハノイに留まるべきか迷うようになったが、何をさて置いても一度両親や四人の妹達に会って、親孝行や適齢期の妹の相談になってやりたいとの思いもあった。しかし、親切に面倒を見てくれた現地人の親兄弟の厚志に對して断り切れなかったので、国交が始まったら必ずハノイに訪ねて来ることを話したところ、娘さんは離れず両親は泣くので、私はこれ以上踏み込まず、次第に疎遠にするほかはないと思い、招待されても断るようにした。

昭和二十年八月十五日正午、全員が司令部前に盛装して集合せよとの命令で、一同が天皇のラジオ放送を聞いた。軍司令官より軽率な行動を謹むようにと訓示があったが、翌日からは軍紀は乱れはじめ、自動車隊の一行三十人は一団となり衣類、食料、兵器、弾薬、燃料等を車二台に山積みして奥地に向かった者や、既に現地の女性と夫婦関係にあった者は早々と司令部を去って行ったことなどを知った。

武装解除には中国の雲南軍が来た。先頭は二十人位の将兵が乗馬で来たが後方には多くの兵隊が来た。靴の代わりに草鞋履きで、鍋、釜、食器類を片方に、もう一方には衣類その他を入れ、天秤棒で担って来た。

食料はすべて現品配給のため鍋や釜が必要であり、夜寝る時は野宿か民家の軒の戸外である。大小便はと尋ねると野糞が彼らの習慣だと言った。この野糞が原因でハノイの一円では中国軍進駐直後からコレラが大流行し、軍医部ではてんでこ舞いさせられた。実際に簡単にコロリコロリと死んでいる。気分が悪いと言いついてから六時間位で米の研ぎ汁色のような白い排便が大量に排出されるのが特徴で、ほとんど体内の水分は出てしまい、コロリと天国へ行く。

衛生兵には方々から呼び出しがあり、患者がいる二、三階から一人ずつ一階に背負って下ろし、担架を取りに行っている間に、患者は十五メートルの広場へ転がりながら行った。きつと苦しかったのだろうか、そこで既に死んでいた。三階の患者もコロリだった。私は患者を扱い終わると炊事場にゆき梅干の汁を湯飲

みに半分グイーと飲み、コレラの感染予防にした。そのうち患者は雲南軍、日本軍、原住民など三十人近くが死に、漸く下火になる。

いよいよ敗戦国だから中国に武器などの引き渡しが始まった。司令部は隷下指揮指揮下部隊の兵器、弾薬、各種砲、自動車、その他衣服類一切を取り纏める責任を背負わされたため、各部、班より三人ずつ選抜してその整理を命じた。軍医部は軍医薬劑将校と私で医務関係の機械、薬物、消耗品などの一覧表を英語、独語、日本語で八部作ることを命じられ、私は専ら数量記入を行ったが、すべて日本国の賠償に当てられるのだと聞かされた。

二日程過ぎたある日、雲南軍より砲や銃、自動車など機械類の操作が未熟だから、毎日各部門から教育者を出して欲しいと要請が来た。このため私は衛生兵として参加した。例えば皮膚病の治療で注射をするにしてもシャワーや風呂に入ったことが無い人間だから体臭、鼻を突き、衣類には垢がコボコボと油を塗ったよ

うで、また足は蛇のうろこのように固く、消毒液も皮膚に染み込まず流れて行く感じでした。でも雲南軍は心の優しい兵隊で感激しながら毎日勤めました。

一方、司令部の全員はハノイから百二十キロ離れた港町海防で捕虜同然の収容所に集結して、自給自足の農業に従事していた。そして三月中旬頃、軍医よりいつでもここを引き揚げられるように書類等を整理しておけ、俺と薬剤官の私物は〇〇の所にあるから忘れなと頼まれ、帰還できる日も近いと悟った。

第一船が出港する十日前に、約百日ぶりに元気で皆と合流した。まず作成した賠償リストと乗船名簿を軍医と共に提出すると、上司より「大変だったろう。ご苦労だった」と労いの言葉を戴き、私は上司と別れ同僚の待つ班へ帰った。班での夕食は大宴会となった。私は演芸会には必ず出演して懐かしい演歌を披露し、また司令部内の演芸大会では一位となり、偕行社のシャツ上下、タバコ、ビール等たくさんのお品を手に入れ、皆に配った事を先輩達が知ってくれた事が嬉しかった。

第一便は真つ白い船で、煙突を利用して赤十字の印がハッキリ見える病院船だった。既に船が入港する事は患者に知らされているらしい。白衣を着た患者が続々埠頭の方へ集まって行く。私は乗船名簿でチェックしていた。その時、私の姿を見付けた患者が「松、世話になったな、有難う」思わず手が出て「元気でね」と。それから続く四十人程の患者はすべて私が手をかけた患者ばかり。「松塚衛生兵」とも呼ぶ者、「兵長」と呼ぶ者、ほとんどの者は「松」「松」「松」ばかりだった。既に甲板のデッキに立っている患者は、顔ははっきりしないが白衣だけ目立ち、一生懸命に手を振っていた。

船は静かに港を離れ、姿も見えなくなり、その夜は彼等の顔、顔、顔が脳裏より去らず眠れなかった。その後第二、第三、第四船と続々と内地へ向かって出港して行き、帰還する者も次第に少なくなってきた。司令部内の月例の身体検査や予防接種を実施したため私を覚えていいのか、ここでも涙の別れやお世話になったと握手や、時には足の脛の傷跡を出して、サイ

ゴンで治療してもらったのだと話してくれるなど別れを惜しんだ。

昭和十八年七月二十五日、サイゴンに上陸して仕えた軍医部長は四代目の金原節三軍医大佐であった。私を一番可愛がって下さったのは岡山県の長岡正人軍医大佐で温厚で無口な人だったが、公私用で出掛けるにも私を当番のように連れ出し、官邸に立ち寄り美味しい物を満腹させてくれたり、酒保でも日用品等良く買って与えてくれた。

昭和二十一年五月二日に名古屋港に上陸、全身消毒のため一泊、翌日最終汽車に便乗し、夜十時過ぎ五年ぶりに懐かしい我が家に着いた。軍服を脱いだら一番心配していた実兄が戦死した事を知らされて涙が止まらない。遺骨箱を開けたが現地の砂が小サジ一杯入っていて驚いた。元気で復員したものの母の実家の福井市内及び近郊は昭和二十年八月夜の大空襲で一面焼け野原となり、全滅したとハノイで聞いた通りだった。それと母の姉夫婦が爆死した事を聞いたが、終戦後の

区画整理で昔の場所にはいない。

翌日、戦災で焼け野原となった福井市内の母の実家へ、元気で復員した報告とお見舞とお手伝いを兼ねて顔を出した。全く手の施しようもない塵の山の後始末で一生懸命だった。従兄弟の兄と出会い、良く元気で戻ったなと涙を流し喜んでくれた。これからの仕事はと尋ねられた。五カ年間の戦争の夢を一日も早く忘れ、ただ元気で長生きしたいと願っていると答え、暫く復興の手伝いに従事した。